

滋慶学園グループ総長
ザ・シンフォニーホール総監

桐朋学園大学院大学
桐朋学園大学学長

浮舟邦彦×梅津時比古

スペシャル対談インタビュー



2016年6月4日(土曜日)
初夏を思わず日差しの中、一人の男性が開場前のザ・シンフォニーホール(TSH)に現れた。桐朋学園大学、大学院大学学長の梅津時比古(敬称略)である。桐朋学園は言わずと知れた日本最高峰の音楽大学。日本から世界に発信された齋藤メソッドを中心に小澤征爾を始め世界で活躍する音楽家を今も育て続けている。学長の梅津は新聞社での経験を生かし日本最高峰の音楽大学の未来を創る。

出迎えたのは2012年、存続の危機にあったザ・シンフォニーホールを「このホールは日本の文化資産であると同時に関西経済人の心意気」なんとか存続したい」と誰もが躊躇したホール経営に手を挙げた滋慶学園グループ総長浮舟邦彦。

この日の演目は関西芸術文化振興の最前線を担う朝日放送主催、ニューヨークを始め世界で活躍する指揮者「ユリー・テミルカーノフ」率いる「サンクトペテルブルグフィルハーモニー交響楽団」。

和やかな出会いではあったが互いに学校経営者として公演前はまた学校環境等の話題に留まり、館内バックヤードの見学等が行われた。そして開演のベルがなり、コンサートが始まった。ロシアを代表するオーケストラの演奏はその国の代表的な作曲家「チャイコフスキー」のピアノ協奏曲「そして、ショスタコーヴィチの交響曲第5番」というお家



日本初のクラシック専用ホールが大阪にできたことが関西経済人の心意気、その大切な文化を未来に継承する

浮舟邦彦

芸を披露し満場の拍手の下、終演。その後、2人の対談が始まった。その対談の一部を披露する。

浮舟 如何でしたか、久しぶりのザ・シンフォニーホールは?

梅津 ほんとに久しぶりにこのホールで聴きました。やはり日本最高のホールですね、というより日本が世界に誇るべきホールです。私が言うのも変ですが、音楽人として、浮舟さん、このホールを残してくれて本当にありがとうございます。

浮舟 私一音楽ファンとして昔はよくこのホールでコンサートを聴きました。ジルベスター(年末のカウントダウンコンサート)があつて隣にホテルがあつたころはそこに泊まって、ジルベスターを聴いて、そして家

内と初詣に行くのが楽しみでした。梅津 素晴らしい年末の過ごし方ですね、最近ではジルベスターが無くなったようですが?

浮舟 とても寂しいと思ひましてね、折角だから昨年末に復活してもらったんですよ。オペレッタ音楽のコンサートでも楽しんで、ジルベスターとその後1月1日の午後にあつたニューイヤークンサートの両方を聴きましたね。

梅津 浮舟さんは経営者としてこのホールを運営する上で大切にされている事は?

浮舟 それはこれまでの大切な文化を何も変えないことです。そして未来に大切なものを継承していくことです。だから名前も変えず、よくあるネーミングライツのようにグ

ループの名前をホールに付けたりすることせず、ザ・シンフォニーホールのまま運営を続けました。梅津 音響もクラシック専用ホールとしてもですか？

浮舟 その通りです。これまでのクラシック音楽の殿堂としての誇りをそのままに、又この残響2秒という素晴らしい音響空間を生かせる新たな取り組みもしています。音楽ファンを増やすことも大切な事です。その為にはもっと多くの人にこのホールを知ってもらう事が大切ですから、ホールとして積極的に出演者を増やす努力や、高度なアマチュア楽団や吹奏楽団にも積極的にこの舞台に立つてもらっています。そして、情操教育の一環として0歳から入場できるコンサートや最新鋭のプロジェクトシンマッピングを導入した音楽と映像のコラボ

レーションなんか積極的に進めています。

梅津 それは素晴らしい決断をされましたね。時代の流れの中でこうした大切な宝物が消えていくのとても残念なことですから。

浮舟 その通りですね。目的はこの大切なホールを未来に継承することです。それが安心して行える環境を作らないといけないと考えています。

梅津 大切なことです。私は仕事柄、世界中のホールの音を聴いて回りました。浮舟さんこのホールは「奇跡の傑作」と言って良いホールなんですよ。

浮舟 「奇跡」

梅津 そうです。技術力が最高のホールを作れるのであれば、このホールが出来た1982年以降、更に技術力は躍進している訳です

技術力だけでは解明できない響き、奇跡、傑作のホール《ザ・シンフォニーホール》

梅津 時比古

から、もっと素晴らしいホールが出来て当たり前じゃないですか。今の時代であればどんな音響も技術的にはそんなに難しいことではないはずですよ。でもこれだけの響きのホールは他に無いと言っても過言ではありません。勿論、技術も大切ですが、それだけでは出来ない運命的な積み重ねがこの音響を作り上げたのだと思います。世界には素晴らしい音響のホールが沢山あります。ウィーンのムジークフェラインもその一つですが、それだけではありません。ホールには特徴があります。私が一番好きなホールはオランダのデン・ハーグにある新教会なんです。元々は教会だった所で本当に綺麗な響きをするんです。今日の演奏をこのホールで聴いて感じたことは、オーケストラの素晴らしい大きなアンサンブルの素晴らしいさと室内楽のような繊細な響きの両面にあると思うのですが、通常のホールだと、大きな音を吸収するが、小さな音が響かないとかその逆もあるのですが、このホールはシヨスタコーヴィチの5番のあの音量、ましてやロシアのオーケストラのフルサウンドを堪能させるかと思えば、3楽章の美しい静かな響き、ヴァイオリンのソロやハープの音色までがホールの隅々まで響く、まさに音楽の両面を完璧に捉える素晴らしいホールです。

梅津 その通りだと思います。ホールが文化を形成した例は沢山あります。例えば、バイロイトの祝祭劇場が無ければあのワーグナーの素晴らしい演奏芸術は育ってこなかったと思います。私も毎年そこを訪れるのですが、音楽家だけでなく、ホールに来る聴衆も共に育たなければ芸術、文化は熟成されない。だから音楽家と聴衆の架け橋になり、芸術文化の醸成の場がホールなんです。さらにヨーロッパではホールに専属の演奏集団がついていて、そのホールだからその演奏をそのホール聴衆が楽しむ、だから醸成された音楽と聴衆が出来上がるという構図ができています。正にホールがその起点になるわけですね。

浮舟 その通りですね、日本の文化でも例えば歌舞伎は歌舞伎座で、文楽は文楽座があるから育ち、継承、継続されてきたわけで、そしてそこには常にそれを愛する聴衆、ファン、支援者が集まっていたんですね。それらが作り上げるのは芸術だけではなく、雰囲気も大切だと思うんです。

梅津 雰囲気という要素は非常に重要だと思います。このホールの素晴らしいさは立地にもあると思います。先ほども見ましたが、音楽だけでなく、ホール内にはヨーロッパのように休憩時間に音楽好きが集うカフェがあり、その窓からは前の公園の緑が見え、正にとっぴりと芸術に入り込める雰囲気が整えられていると思いました。

浮舟 そうなんです。あのカフェも作り変えまして、ゆっくり座ってお茶やワインを楽しんでもらえる空間を作りました。終演後も少しホッとする時間を過ごしてもらえようになっています。

梅津 本当にクラシック音楽にふさわしい場で聴いている感覚を覚えます。このロケーションも含めてこれほど素晴らしい場所が残されていることに感動しました。

浮舟 ありがとうございます。梅津さんのお話を聴いて、益々頑張る気が湧いてきました。まだ、お帰りまでお時間もありなので、続きは一杯やりながらもう少し如何ですか？

梅津 良いですね!!

と二人の会話はその後、場所を移して更に音楽、経営、これからの展望と発展するが、今回はこのあたりまで。

二人の第2ラウンドの会話の中から、新しいコラボレーションの機運が高まりつつあるのを感じたのでそのあたりをまた後日皆さんにお届けしようと思います。

日本音楽界の最高学府の学長からの高い評価を受けたザ・シンフォニーホールのこれからに、ご期待を!!

記 ザ・シンフォニーホール
取締役ゼネラルマネージャー
音楽総監督

喜多 弘悦